

益田市市長
山本 浩章

世界中で多くの感染者、死者を出している新型コロナウイルスの流行については、このコラムを書いている4月上旬現在、いまだ拡大の勢いが衰えず、不安が高まっています。

ところで、感染症といえ、私事ですが、およそ1年前、元号の変わり目と重なった超大型連休の際、風疹に臥せていました。予防接種さえ受けておけば防げたのにと、危機感の欠如を後悔したものでした。

さらに私事ながら、その約2カ月後、再び感染症について考察させられる機会が訪れました。一念発起して受検した実用英語技能検定（英検）1級の英作文の論題がなんと「数十年後、感染症はより大きな問題となるか」だったのです。

つい先頃自らの身体を苦しめ、多くの方から温かいお見舞いの言葉を頂戴し、また数名の方からは厳しいご叱責をいただく原因となった感染症にまたもや頭を悩ませることにな

るとは予想もしていませんでした。出題者にしてもエボラ出血熱やジカ熱、結核等は念頭にあったのかもしれないですが、よもや1年もしないうちに本当に新しいウイルスが世界的に猛威を振るうことまでは予期していませんでした。

この論題を肯定する根拠は今では日本語でならスラスタと書けそうです。飛行機など高速交通の普及と人の移動の活発化に伴う感染拡大リスクの増大、それまで有効だった薬剤に耐性を持つ新たな病原体の出現、貧困などから医療の普及が遅れ、衛生状態の改善が進まない発展途国での顕著な人口増など。

自身の実体験の記憶が鮮明だったので、検定当日は肯定の立場で答案を書きましたが、結果は残念ながら不合格でした。風疹の熱が下がってからの回復期、自分をとりまいている状況を英語では何と表現するのか一つずつ確認しておけばよかったです、またもや悔やしい思いをしたものでした。

全国的に感染者、死者の増加に歯止めがかからない中、ついに島根県内でも感染が確認されました。お亡くなりになった方のご冥福をお祈りするとともに、発症された方の一日も早いご快復を願います。市民の皆様にも、感染予防への最大限のご配慮とご協力をお願いいたします。

益田市の文化財の紹介

第8回 板井川城跡(美都町板井川)

【問い合わせ先】 市文化財課 ☎ 31-0623

名称	板井川城跡
読み	いたいがわじょうあと
指定	益田市指定文化財
種別	史跡
員数	1所
所在地	益田市美都町板井川
所有者	二川自治会
年代	室町時代後期
指定期月日	昭和56年3月24日

益田市指定文化財・史跡の板井川城跡は、美都町板井川にある山城の遺跡です。全長200mの尾根筋に複数の堀切（尾根を分断するように掘られた水のない堀。尾根伝いの進軍を防ぐ。）が施されています。板井川の郷組の奥にあり、道川または若杉・芋原を経て広島県方面へと抜ける道を押さえる位置にあります。

南北朝時代の暦応4（1341）年、北朝方の安富兼幸（教元）は、三隅氏の籠もる「板屋河」で合戦しており、「彼城」「要害」とあるため、これが板井川城の初見と考えられます（「安富家文書」）。

板井川は、益田氏と三隅氏が激しく争った地域の一つで、丸毛（丸茂・疋見（匹見）・道川とともに室町時代・戦国時代を通じて何度も争奪の対象となっています。

15世紀後半から三隅氏内部でしばしば紛争が起こります。弘治元年（1555）年、益田氏は三隅に攻め

寄せて三隅の沿岸部（浜田市旧三隅町域）を攻略し、三隅氏は内陸部に拠点を移します。翌2年、益田氏は宇津川城を攻略しており、戦った相手は三隅氏と考えられます。

永祿4（1561）年に毛利氏が本格的に石見の攻略に乗り出すと、益田氏も協力して尼子氏方の三隅氏を攻撃し、翌5年正月頃、益田氏は板井川城を攻略しました。小原氏が活躍したようで、毛利氏・益田氏からこれを称える手紙が与えられています（「広島大学所蔵「小原文書」」）。



板井川城跡（中央やや右の山）



板井川城跡の位置図